

昭和三七年度史学研究会大会

十一月一日(木)・二日(金)

第一日見学会は、柴田実理事の懇切な解説のもと、大津京址にはじまり、柴香染宮址・恭仁京址を巡回した。折よく好天にめぐまれ、柴香染宮址では持参の弁当を開くなど、参会者一同和気霽々のうちに宮址を巡回し、古京址に対する認識を新たにした。なお途中滋賀県立信楽窯業試験所また恭仁宮址近傍の恭仁小学校郷土室(出土品を保管・陳列)を見学した。第二日總會及び大会は午後一時より京都大学楽友会館において開催した。總會は宮崎市定理事長の挨拶について、織田武雄常任理事より会計・会務の報告があり、さらに本誌四五巻三号所報の通りの本会の改組の経緯について説明が行なわれた。公開講演は、東北大学教授伊東信雄氏、京都大学教授中原与茂九郎氏により、次の演題・要旨で行なわれた。

東北の古代文化(スライド使用)

伊東信雄氏

〔要旨〕東北地方がひらけたのは大化以後、ことに奈良時代以後に行われた日本國家の東北經營の結果であつて、それ以前は蝦夷のすむ農耕以前の社会であつたと見るのが、これまでの歴史の常識である。しかし考古学的に見るとこの見方は変らざるを得ない。

奈良時代の國家の支配圏内の東北文化をもつともよく代表するものに多賀城があげられる。多賀城跡の発掘調査は昨年から行われており、昨年と本年度その附属寺院であつた多賀城廢寺(高崎廢寺)の規模を明らかにすることが出来た。それによれば金堂、塔、講堂、僧坊、中門、鐘樓、經樓、東倉、西倉などをなえた本格的な寺院で、その伽藍配置は法起寺式の金堂を東向きにしたもので、陸奥國分寺が南大門、中門、金堂、講堂、僧坊を南北線上におき、金堂の東に塔を配した天平様式であるのに対して白鳳様式である。太宰府の觀世音寺がこれと同じ配置をもっていたらしい。附属寺院ばかりでなく、多賀城の内城のプランと太宰府都府樓のプランはほぼ同じであつて、多賀城が辺境の兵營というよりは、

太宰府と同じく朝堂院式の建物を有する政庁であつたことを示している。多賀城の造営は

養老、神龜の頃とされているが、その瓦は多賀城附近で焼かれたものではなく、多賀城北、三〇―四〇キロにあつた玉造柵、新田柵附近で焼かれたものである。その瓦窯址の一つである遠田郡田尻町木戸瓦窯址からは

(新田)郡仲村郷他辺里長

二百長 丈部哲人

の窠書ある平瓦が発見されていて、郷里制が当時の日本の最北端である新田郡にまで行われていたことを示している。しかもこの地方には大きな前方後円墳があつて、奈良朝以前からひらけていたことがわかるのである。

それよりも北方の奈良時代には化外の地と見られていた地方の文化はどうであつたか。

岩手県中部には経一〇メートル前後の小円墳からなる古墳群が各所にある。この中に和銅開珞を出すものがあつて、奈良時代のものであることがわかるが、その積石石室の様式はこの地方特有であるから、奈良時代のこの地方人、すなわち蝦夷ののこしたものと見られる。その副葬品には藤手刀、鉄鍬、鉄斧、鉄鍬、鉄鑿、勾玉、ガラス玉などがあつて、奈

良時代のこの地方の蝦夷はすでに鉄器を使用し、農耕を行い、騎馬の風を有し、勾玉、ガラス玉などの装身具を身につけ、死者のために小さな高塚墳墓を営むというように古墳時代末期の日本人とちがわぬ生活をしていたことがわかる。つまり蝦夷の文化は日本人の文化と本質的に違うものではなく、一歩おくれ

ていたにすぎない。しかも稲作農業の開始はこれよりもはるかに古く、弥生式中期末の土器で靱痕のある土器が青森県にまで発見されている。この古くから行われていた稲作農業の発達の上に奈良時代の文化が展開して行くのである。

東北で稲作農業が行われるようになったのは、普通に考えられているように、蝦夷征伐の結果ではなく、逆に蝦夷の農産生産力の向上が、日本国家の蝦夷征伐を惹起したのである。(伊東信雄)

古代西アジア史研究の現状

——T・ヤコブセン『古代メソポタミア

の政治的發展』を読んで——

中原与茂九郎氏

(中原氏の講演の内容は、近く論文として本誌に掲載する予定である。)

### 十二月例会

十二月一日(土)午後一時

於京都大学陳列館第二教室

ヘレニズム・ローマ時代のアラブの遺跡

清水 誠

一九六一年一月、エジプト・カイロ大学に留学され、一九六二年六月帰国され清水誠氏を迎え、氏が研鑽の余暇を利用して六一年秋ヨルダン・シリア・レバノンを旅行した際に見学された、同地のヘレニズム・ローマ時代の遺跡についての話を聞いた。

### 日本学術会議の選挙結果

さきに行なわれた日本学術会議第六期の会員選挙にさいし、本会では第一部全国区候補者として井上智勇氏を、同じく近畿地方区候補者として貝塚茂樹氏を推薦しておりましたが、両氏とも当選されませんでした。両氏の当選を、心からおよろこびして、ここにお知らせいたします。

### 委員の交代

本会委員横山裕男氏は、昭和三十七年十二月三十一日を以て辞任し、代って小野寺郁夫氏が委嘱された。

## 学界消息

### 読史会

昭和三十七年度秋季大会

十一月三日(祝)午前九時〜午後五時

於、京大文学部第七教室

田租制試論

八木 充

十・十一世紀の「侍」について

河音 能平

修多羅宗について

田村 円澄

歌麿の大首絵について

高尾 一彦

歴史叙述における倒叙法の諸問題

横田 健一

慶長・元和期の佐賀藩財政

城島 正祥

日本軍国主義の階級的基礎

佐々木隆爾

下関条約の通商関係条項について

中塚 明

鷗外の歴史思想

酒井 忠雄

山路愛山の歴史思想について

山岡 桂二

福地桜痴(源一郎)の歴史思想について

鈴木 詳造

遊部考

五来 重

古代に於ける妙見信仰の一面

中西 用康

十一月例会

昭和三十七年十一月十日(土)午後一時より

於・楽友会館

岸俊男「近江国志河郡の計帳について」

十二月例会

昭和三十七年十二月八日午後二時より

於・楽友会館

上横手雅敬「追加法について」

東洋史談話会

昭和三十七年度大会

十一月三日（祝）午前九時〜午後五時

於 京都大学人文科学研究所講堂

范氏義莊について 近藤 秀樹

宋初河北路鹽塩の禁權されなかつた事情についての一考察 河原 由郎

日宋貿易と日本商船の海外進出 森 克巳

道教の応報説の展開に関する一試論 秋月 観映

桓玄―慧遠の礼教問題 島田 虔次

アフガニスタンの言語政策とその実情 勝藤 猛

エジプトに於ける近代税制確立について 中岡 三益

狸獠の文化 松本 信広

慕容燕の権力構造

漢代の詔書と律令との関係

漢代の里制と唐代の坊制

京大東洋史大学院例会

十月二十六日

於 東洋史研究室

十一月九日

於 東洋史研究室

十二月十九日

辛亥革命と農民階級

一五世紀初頭の Moghulistan

史通について

西洋史読書会

第三十回西洋史読書会秋季大会

昭和三十七年十一月三日

於 京大楽友会館

「ルーン問題」解明のために

《obnoxatio》

——Homageの一起源——森 洋

谷川 道雄

大庭 脩

宮崎 市定

於 東洋史研究室

佐竹 靖彦

合評会

陳列館会議室

狭間 直樹

間野 英二

稲葉 一郎

政治と美術

尾鍋 輝彦

会田 雄次

衣笠 茂

木崎 良平

奈良盆地の場合——

於 奈良女子大学

於 伊谷純一郎

イギリス革命と地主制・その思想的的研究

——J・ハリントンの「農地法」をめぐって——

隅田 哲司

フランス革命と一ロシア人

山本 俊朗

Plantation Overseer の役割について

清水 博

歴史的認識の価値性

——カール・ランブレヒトとフリードリヒ・マイネッケ——

西山 勤二

スペイン内乱とナチス・ドイツの干渉

斎藤 孝

歴史的説明と科学的説明

神田 四郎

歴史における系統発生と個体発生

——西欧的史観の一つの解釈と応用——

於 伊谷純一郎

於 伊谷純一郎

アメリカにおける都市地理学の動向

——特に計量的方法の適用について——

笹田友三郎

人文地理学会一九六二年度大会

十一月三・四日 於 立命館大学経営学部

大都市の青果物入荷圏 坂本 英夫

鳥取県海岸砂丘(砂浜)地帯における菜園

衰退の地域構造 大迫 輝通

飯川平野における乾田化と土地利用 高木 幹雄

伊豆農村の農業形態に関する若干の試論 佐々木清治

細井 淳一

瀬戸内延縄漁村二つの場合 新宅 勇

豊中市における都市化現象

——昭和三六年度町別人口統計及び農地

転用状況を中心としての若干の分析—— 高橋 達郎

木村 辰男

貨物運賃の地理的性格 窪田哲三郎

銅製錬工業における立地条件の変遷

会津丸物木地業 —— 発展と製造工程—— 馬場 章

中京地域の中小綿紡績業の地位と性格

和田 明子

フランス山地酪農におけるAlpagesの衰退

石原 照敏

台湾の米作農業 —— 研究の反省 ——

石田龍次郎

幕末・明治初期における村落規模

山澄 元

地名学と地図学とのあいだ

——地名問題の基本的命題—— 山口恵一郎

仁徳帝の治河とその遺跡附近の地名

畑中 友次

長岡京の左京について

死亡率の「冬季集中」に関する歴史的考察 中山 修一

日本の屋根型と分布に関する一つの考察 初山 政子

——長棟型と短棟型の分布の系譜につい

て—— 佐藤甚次郎

石見高原における小作慣行と地域構造

千葉 徳爾

社会的基体としての沖繩村落における社会的制度物

——沖繩本島羽地村真喜屋の場合—— 小川 徹

淀川下流域域人文河川誌

——段碓の実態調査——

内田秀雄・中井聡

笠置山地・木津川上流流域の山村

西田 和夫

びわ湖沿岸における工業の発達と地域的類型

宮畑巳年生

長浜市における工業と背城農村について 木村 憲治

共同研究「東北の歴史地理調査」

調査の経過

——東北古代の歴史地理学的研究—— 藤岡謙二郎

城柵と郡家 足利 健亮

遺跡・遺物からみた東北の性格 西田 彦一

東北の糸里 —— その北限と地割形態 —— 桑原 公徳

東北における古代行政区画の成立 服部 昌之

東北における手工業の発生と現状 西村 陸男

東北における綿業および綿製品流通

浮田 典良

東北における綿業および綿製品流通

浮田 典良

浮田 典良

東北の焼畑農業技術

——北上山地のアラクをめぐる一・二の

問題—— 佐々木高明

共同研究「中世の土地開発と集落構造に関する地理学的研究」

中世の土地開発と集落構造

——とくに土地開発に関するインテンシ

ヴ調査の結果より—— 谷岡 武雄

中世の海岸地形と耕地

——周防灘北岸の場合—— 小野 忠熙

安芸地方における中世の防禦的集落につ

て 服部 昌之

湖東平野の豪族屋敷

中世豪族屋敷と城砦の関連 小林 博

甲信地方の中世防禦的集落 藤本 利治

——善光寺平における地理的分布と土地

開発上の意義について—— 樋口 節夫

南関東の戦国大名領における豪族屋敷村

菊地 利夫

中世集落に見られる古代遺制

——春日社領撰津国垂水西牧の場合——

渡辺 久雄

日本考古学協会昭和三十七年度大会

公開講演 十月二十七日 午後二時

於 奈良学芸大学大講義室

考古学からみた邪馬台国 榎本杜人氏

古代史からみた邪馬台国 井上光貞氏

シンポジウム 十月二十八日 午前九時三

十分 於 奈良学芸大学大講義室

主題 二三世紀における考古学上の諸問題

研究発表 十月二十七日 午前九時三十分

十月二十八日午後一時 於 奈良学芸大学大講義室

研究発表題目と発表者

1 西部日本における前期旧石器時代遺跡と

その文化 金関丈夫・国分直一・佐藤暁

2 愛媛県上黒岩岩陰遺跡発見の遺物

江坂輝弥・岡本健児・西田栄

3 広島県馬渡岩陰遺跡の第一次調査

松崎寿和・潮見浩

4 神奈川県座間町の縄文時代住居址

大場碧雄・寺村光晴

5 縄文晩期における群葬の新例について

——長野県伊那市手良山遺跡の調査

林茂樹・本田秀明

6 北海道落部遺跡の調査

川村喜一・桜井清彦・杉山莊平

津島総合グラウンド遺跡の調査報告

——特に弥生文化前期の遺物について

鎌木義昌・近藤義郎・西川 宏

9 駿河矢崎遺跡の調査概要

小野真一・佐藤民雄

10 埼玉県五領遺跡第4次調査について

杉原莊介・大塚初重

11 魏志倭人伝にみえる「青大句珠」再考

和島誠一・金井塚良一

12 大阪府池田市茶臼山古墳

中川 成夫

13 千葉県流山町東深井発見の埴輪魚

堅田 直

14 日本発見の初期の馬具

下津谷達男

15 福岡県飯塚市池田横穴古墳群調査概報

小野山 節

16 福岡県飯塚市池田横穴古墳群調査概報

児島隆人・藤田等・高島忠平

17 広島県庄原市本郷町諏訪一号古墳

本村 豪章

久永春男・田中稔

18 昭和三十七年度多賀城廃寺跡の発掘

伊東 信雄

19 小田市市下替我遺跡第3次発掘調査

樋口清之・大脇直泰

周東一也・金子皓彦

20 庄内地方における古代窯業遺跡の調査(1)

久保常晴・坂詰秀一

21 岡山県倉敷市浅原安養寺経塚群

鎌木義昌・間壁忠彦

22 三重県伊勢市朝熊山経塚発掘調査

石田茂作・服部貞藏・稲垣晋也

23 尾張国日間賀島下海古窯址の調査

杉崎 章

追加 1 北海道における土器文化の実年代について

大場 利夫

2 福山市草戸千軒町遺跡第2次調査

村上 正名

3 北海道沙流川流域の考古学調査

核井 清彦

4 大阪府茨木市上寺山の竈塚

水野正好・西谷 正・田代克己

5 佐渡長木発見の旧石器

本間 嘉晴

6 滋賀県野洲郡野洲町小篠原銅鐸埋蔵遺跡

調査概要

水野 正好

委員会だより

◇前号編集後記にて予告しておきましたように、四十六巻より「史林」の編集上に若干の新工夫を加えることになりました。その第一は、「編集後記」欄を廃止して、代って「委員会だより」欄を設けたことです。その意図するところは、従来の編集後記が、いわば雑誌の体裁上のアクセサリに留まっていたことを反省して、一つは事務上の連絡の場とすること、今一つは、積極的に、委員会と会員各位との連りを深めようとするにあります。◇新工夫の第二は、「学界消息」欄を拡充することです。史学研究会の大会、例会の行事は、研究発表の題目だけでなくその内容も要約して掲載します。また、関係諸学会の行事は、可能な限りその範囲を拡大して掲載する予定です。そのほか、新資料の発見、調査、あるいは遺跡の発掘など、努めて掲載してい

きたいと考えています。

◇ところでこうした「学界消息」欄の拡充の為には、どうしても会員各位のご協力を得なければなりません。本会と関係の深い学会については、直接案内を差上げましたが、本誌に掲載されるべきニュースはどしどしお寄せ下さいませよう、お願いいたします。(宛先は「史林」編集委員会宛)

◇なおまた、「執筆者紹介」は、従来一個所にまとめて掲載していましたが、本号より各論文の末尾に掲載いたします。

◇最後に事務上の連絡として、毎度のことですが、会費不足の方はよろしく願ひあげます。

一九六三年二月二十五日印刷  
一九六三年一月一日発行 定価二〇〇円

史 林 (第四六巻第一号)

発行所 京都市左京区吉田本町  
京都大学文学部内

印刷所 京都市下京区西七条御所ノ内東町三九  
理事 長 宮崎 市定  
振替 京都五一五五番  
中村印刷株式会社